

I. 導入

おはようございます。使徒20:17にはこうあります。「パウロはミレトスからエフェソに人をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。」前回の学びから、パウロの第三次宣教旅行が終盤に差し掛かっていることがわかります。パウロは、五旬節までにエルサレムへ戻ろうと先を急いでいるところでした。ここで、エフェソまで行って教会の人々に挨拶する代わりに、パウロはエフェソ教会の長老たちを自分のもとへ呼び寄せました。長老たちはパウロに会って話を聞くために、約60キロの道のりを喜んでやって来ました。



パウロが長老たちに話した内容の大筋は、今日の聖書箇所に記されています。この箇所は、使徒言行録の中で唯一、パウロが成長したクリスチャンに向けて語った内容の記録です。使徒言行録にあるパウロの他のメッセージはすべて伝道を目的としたものです。ここでは、パウロは教会の指導者たちを励まそうとしています。では、使徒17:18-38を読んで、パウロが長老たちに何を語ったか見ていきましょう。

II. 聖書朗読 (使徒言行録20:18-38, 新共同訳)

20:18 長老たちが集まって来たとき、パウロはこう話した。「アジア州に来た最初の日以来、わたしがあなたがたと共にどのように過ごしてきたかは、よくご存じです。20:19 すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。20:20 役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。20:21 神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証ししてきたのです。

20:22 そして今、わたしは、“霊”に促されてエルサレムに行きます。そこでどんなことがこの身に起こるか、何も分かりません。20:23 ただ、投獄と苦難とがわたしを待ち受けているということだけは、聖霊がどの町でもはっきり告げてくださっています。20:24 しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。20:25 そして今、あなたがたが皆もう二度とわたしの顔を見ることがないとわたしには分かっています。わたしは、あなたがたの間を巡回して御国を宣べ伝えたのです。20:26 だから、特に今日ははっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。20:27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えただけです。

20:28 どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なされたのです。20:29 わたしが去った後に、残忍な狼どもがあなたがたのところへ入り込んで来て群れを荒らすことが、わたしには分かっています。20:30 また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。

20:31 だから、わたしが三年間、あなたがた一人一人に夜も昼も涙を流して教えてきたことを思い起こして、目を覚ましていなさい。20:32 そして今、神とその恵みの言葉とにあなたがたをゆだねます。この言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです。

20:33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。20:34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。20:35 あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」20:36 このように話してから、パウロは皆と一緒にひざまずいて祈った。20:37 人々は皆激しく泣き、パウロの首を抱いて接吻した。20:38 特に、自分の顔をもう二度と見ることはあるまいとパウロが言ったので、非常に悲しんだ。人々はパウロを船まで見送りに行った。

III. 教え

これは、ミレトスで語られたメッセージです。ミレトスは、パウロが生まれる千年以上前から主要な港として栄えていました。パウロが町のどの部分で話をしたか定かではありませんが、町に到着すると現地会の会堂を訪れるようにしていましたから、今回も会堂で話したのかもしれない。



パウロはここで自分自身のことを多く語ります。彼がキリストに忠実に仕えたことを話し、エフェソの長老たちもその模範に従うよう促します。エフェソの人々と3年間ともに過ごしたパウロの生き方や教えはずで知っているはずだとパウロは繰り返します。

いくつかの箇所をじっくり見てみましょう。使徒20:19でパウロはこう宣言します。「すなわち、自分を全く取るに足りない者と思い、涙を流しながら、また、ユダヤ人の数々の陰謀によってこの身にふりかかってきた試練に遭いながらも、主にお仕えしてきました。」パウロは迫害を受けましたが、そこであきらめませんでした。涙を流したとありますが、自分の苦しみを嘆いたのではなく、エフェソの人々のために流した涙でしょう。パウロは高等教育を受けた身分の高い人でしたが、エフェソの人々に仕えました。

パウロには献金で生活を支えてもらう権利がありました。しかし、使徒20:33-35で、エフェソの滞在中の生活費は自分で稼いだと強調しています。「20:33 わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。20:34 ご存じのとおり、わたしはこの手で、わたし自身の生活のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。20:35 あなたがたもこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエス御自身が『受けるよりは与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。」

「受けるよりは与える方が幸いである。」この原則を理解し、実践すれば、私たちが喜びを体験する機会は大いに増えると確信します。受けることで嬉しさは感じますが、与えることの喜びははるかにまさります。ここでは、パウロがとくにエフェソ教会の長老たちに惜しみなく与えるよう勧めていることが分かります。長老たちに、受ける人ではなく与える人になりなさいと励ましているのです。何かを受けるために神の奉仕に入るべきではありません。むしろ、与える機会をさらに求めて仕えるべきです。

とは言え、このパウロの教えは、生活費にあてるための献金を受け取らなかったという意味ではありません。実際、コリント第二11:8では、コリントの教会に対してこう書いています。「わたしは、他の諸教会からかすめ取るようにしてまでも、あなたがたに奉仕するための生活費を手に入れました。」パウロは、しっかりと根付いた教会からは支援献金を受け取ることがあったようですが、伝道者として奉仕していた町では、献金の受取を辞退していたようです。

たいていの場合、教会で専属に働く奉仕者は、教会から支援を受けます。パウロもこれについてコリント第一9: 14:15aで教えています。「9:14 同じように、主は、福音を宣べ伝える人たちには福音によって生活

の資を得るようと、指示されました。9:15 しかし、わたしはこの権利を何一つ利用したことはありません。」パウロには、コリントやエフェソの教会員から献金を受け取る権利がありましたが、その権利を行使しませんでした。このことから、パウロがイエスの信仰へと人々を勝ち取ろうとするのは私腹を肥やすためだという誤解を与えたくなかったと考えることができます。

パウロは使徒20章で、彼が教えた福音のメッセージについて語ります。使徒20:20-21では、こう主張します。「20:20 役に立つことは一つ残らず、公衆の面前でも方々の家でも、あなたがたに伝え、また教えてきました。20:21 神に対する悔い改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰とを、ユダヤ人にもギリシア人にも力強く証してきてきたのです。」公衆の場でも、家庭集會でも、パウロは悔い改めとイエスを信じる信仰の必要性をすべての人にはっきりと語りました。すべてつつみ隠さず教えました。パウロは福音を誰にも惜しみなく分かち合いました。人々にとって役立つことはすべて教えたのです。

多くの宗教では、一部の内輪の人間や指導者になった人々にのみ知らされる秘密の奥義があります。しかし、パウロの福音に秘密はありません。また、真のキリスト教にも秘密の奥義などありません。たくさん学んだ人は多くを知っています。これは、勤勉にともなう当然の結果です。しかし、福音の教えのすべては、誰にも開かれたものです。未信者も新しい信徒も成長したクリスチャンも、みな同じものから学ぶことができます。聖書はすべての人に開かれた書であり、福音のメッセージとその信ぴょう性を自由に検証できます。神のみことばの前に、私たちは皆平等です。



パウロは、聖霊によってエルサレムに行くよう促されたことを長老たちに話しました。そこで投獄と苦難が待っているのもわかっているとも言いました。どのような試練が来ようとも、パウロは神に与えられた使命を果たす覚悟でいました。聖霊に知らされて、すぐには戻れないこともわかっていたので、長老たちにはっきりとそのことを告げました。長老たちはそれを聞いて悲しみました。

使徒20:26-27で、パウロは続けてこう言います。「20:26 だから、特に今日はっきり言います。だれの血についても、わたしには責任がありません。20:27 わたしは、神の御計画をすべて、ひるむことなくあなたがたに伝えたからです。」パウロは、教えをすべて伝える責任を感じていました。パウロは神のみこころのすべてを伝えたことで、他人の血に責任を負っていないと言います。すると、神のみこころの一部しか伝えない説教者はどうなるのでしょうか。聖書を教える立場にある者に向けられた厳しい警告がここには含まれていません。

聖書は分厚い本ですから、誰にでもお気に入りの聖書箇所や苦手な箇所があつて当然です。けれども、好きな教えだけ取り入れて他は無視するということはできません。残念ながら、一般信徒だけでなく聖書を教える立場にある多くの人、聖書をスクラップブックのように扱ってしまいます。つまり、自分の好みに合わせて要らない部分を切り取ったり好きな部分を好きなように並べ替えたりします。お気に入りの聖書箇所があるのは構いませんが、神のみこころの全体像を知るためには、聖書全体を読んで学ぶ必要があります。



余談ですが、さまざまなトピックを選んでメッセージをするよりも、聖書を書簡ごとに学ぶ講解メッセージが望ましいと思うのはこういう理由からです。聖書を一節ごとに教える方法は、まどろこしく感じるかもしれませんが、バランスの取れた健全な霊の糧を確実に提供します。聖書を1ページずつ学んでいくことで、余すところなく神のみこころのすべてが明かされます。



一方、毎週新しいトピックを選んで教える方法は、食べ放題のレストランで毎日食事するようなものです。健康的な食べ物は揃っていても、どうしても好きなものばかり食べてしまいがちです。もちろん、トピックを選んで教える方法でも、自己抑制と綿密な計画によってバランスの取れた教えを維持する牧師もいるでしょう。ただ、聖書を書簡ごとに教えるほうが、教会と牧師の両方にとって堅実で間違いがないと言えるでしょう。

使徒20:30で、パウロはエフェソの長老たちにこう警告しました。「また、あなたがた自身の中からも、邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れます。」真理を曲げる人々の中には、羊をむさぼり食うよう猛な狼のような人がいます。一方、神についての考え方が少しずれてしまっただけの人もいます。おそらく、好きな聖書箇所にはばかり集中するあまり、あまり好みではないみことばを見過ごした結果でしょう。

どういった状況にせよ、パウロは使徒20:28で長老たちにこう促します。「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなさった神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです。」十字架上で、イエスはご自身の血潮によって私たちを買い取ってくださいました。つまり、私たちの身代わりとなっていていのちをささげてくださいましたのです。それは、私たちが罪の赦しと永遠の命を受けるためです。私たちがイエスを信じ、救いを受け取るなら、私たちはイエスのものとなります。そして、教会で群れの監督者として仕える牧師や長老のもとにおかれるのです。

十字架のイエスは、この世の罪を取り去ってくださる神の小羊です。一方、よみがえりのイエスは、私たち全員を守る偉大な牧者です。私たちは皆、羊のような存在です。愛情をもって世話をし、迷い出ないように安全に守ってくれるお方を必要としています。偉大な牧者であるイエスは、天から私たちを見ておられます。ご自身の羊ひとりひとりを愛し、気を配ってくださいます。イエスは、ご自身のも



とで働く牧者として教会に気を配るよう、牧師や長老を召されます。

ペトロはこのことについて、ペトロ第一5:1-4でこう言います。「5:1 さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。5:2 あなたがたにゆだねられている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世話をしなさい。卑しい利得のためにはではなく献身的にしなさい。5:3 ゆだねられている人々に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい。5:4 そうすれば、大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしばむことのない栄冠を受けることになります。」



教会の牧者としての責任は多大ですが、忠実に仕える者には報いもあります。しかし、先ほど言ったように、何かを得ることを期待して奉仕に入るべきではありません。与えるために仕えるべきです。与えることのうちに、大きな祝福を見出すのです。

パウロの宣教旅行は、終わりを迎えようとしています。長年忠実に仕え、神の祝福によって彼の働きには驚くほどの実りがありました。けれども、それで終わりではありません。パウロはなお、信仰の道を走りとおそうとしています。使徒20:24で彼はこう言います。「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」パウロの心からの願いは、任務をしっかりとやり遂げることです。主イエスは、神の恵みの福音を告げ知らせる使命をパウロに与えられました。パウロはその使命を忠実に果たそうとしていました。

IV. 結び

私たちはどうでしょう。主が私たちの前に置かれた任務は何かと自問してみてもどうでしょう。神は、信仰の道を走りとおすよう私たち全員を召しておられます。また、御名に栄光をもたらす奉仕に召された人もいます。教会での役割はそれぞれ違って、奉仕の大小にかかわらず、しっかり走っているかどうか各々考える必要があります。神に召された道をしっかり走っているでしょうか。神が与えてくださった役割を誠実に果たして仕えているでしょうか。しばらくは順調に走っていたけれど、疲れて足取りが重くなったり、走るのをやめてしまったりしていますか。もしそうなら、また走りださなくてははいけません。

パウロの模範は、ゴールにたどり着くまで忠実に走り続けようと私たちを励まします。しっかりとゴールすることを望まない人はいないでしょう。主イエスが私たちを天国の故郷に喜んで迎え入れてくださる声を聞きたいでしょう。走り続けてください。あきらめないでください。そうすれば、ついにゴールする日がやってきたとき、イエスにお会いし、主がこう言ってくださるのを聞くことができるでしょう(マタイ25:21)。「忠実な良い僕だ。よくやった。」

祈りましょう。

V. 祈り

